

内田 吉哉 (Yoshiya UCHIDA)

学位：博士（文学）

略歴：関西大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了

関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程修了

専門分野：日本史（都市文化史、非文字資料）、文化遺産学

研究課題：1. 非文字資料を用いた都市文化史研究

2. 愛知・尾張地域研究

3. デジタル人文学

【著書】

- ・『日本と世界の暮らし どこが同じ？どこがちがう？ 教科書に出てくる「暮らしの中の和と洋』』（共著、汐文社、2017年3月）
- ・『竹生島宝巖寺調査報告』（編著、関西大学大阪都市遺産研究センター、2015年2月）
- ・『「豊臣期大坂図屏風」の謎を解く』（単著、関西大学大阪都市遺産研究センター、2015年2月）
- ・『「牧村史陽氏旧蔵写真」目録』（共編著、関西大学大阪都市遺産研究センター、2014年3月）
- ・『新発見 豊臣期大坂図屏風』（共著、清文堂出版、2010年4月）

【論文】

- ・『尾張名所図会』に描かれた酒（『愛知文教大学比較文化研究』第17号、2023年2月）
- ・『尾張名所図会』に描かれた地域の食文化（『愛知文教大学教育研究』第12号、2022年2月）
- ・「地域の文化遺産学習のための動画コンテンツの開発 — 有松の重要伝統的建造物群保存地区の事例 —」（『愛知文教大学教育研究』第11号、2021年3月）
- ・「城郭が近代以降の都市景観に及ぼした影響に関する考察 — 岡崎城の事例を中心に —」（『愛知文教大学比較文化研究』第16号、2021年2月）
- ・「高度経済成長期における犬山城下町の都市開発と文化資源的価値」（『愛知文教大学論叢』第22巻、2019年3月）
- ・「日本文化教育における動画コンテンツの活用 国立民族学博物館開発の可搬型ビデオテークを用いた事例」（『愛知文教大学教育研究』第9号、2019年3月）
- ・「地域史教育における地理情報の補足に関する試論」（『愛知文教大学論叢』第21巻、2018年11月）
- ・「高度経済成長期における復元・復興・模擬天守の歴史的役割に関する考察 — 模擬天守「小牧城」（小牧市歴史館）の事例を中心に —」（『愛知文教大学比較文化研究』第15号、2018年11月）
- ・「大阪市史編纂所所蔵の牧村史陽氏撮影写真について — 資料的価値の検討とデジタルアーカイブ化の手法 —」（大阪市史編纂所『大阪の歴史』第87号、2018年10月）
- ・「豊臣期大坂城南側の様相に関する試論 — エッゲンベルク城所蔵『豊臣期大坂図屏風』に描かれた

景観から 一」(大阪市史編纂所『大阪の歴史』86号、2015年7月)

- ・「牧村史陽の写真で見る大阪」(関西大学大阪都市遺産研究センター『大阪都市遺産研究』第5号、2015年3月)
- ・『「牧村史陽氏旧蔵写真」の研究とデジタルアーカイブ化」(関西大学博物館『阡陵』No.69、2014年9月)
- ・「消えた大阪、新しい大阪 一『牧村史陽氏旧蔵写真』に見る大阪の都市景観 一」(関西大学大阪都市遺産研究センター『大阪都市遺産研究』第4号、2014年3月)
- ・『「豊臣期大坂図屏風」に描かれた景観の再検討」(関西大学大阪都市遺産研究センター『大阪都市遺産研究』第3号、2013年3月)
- ・『「豊臣期大坂図屏風」の人物と意匠」(関西大学大阪都市遺産研究センター『大阪都市遺産研究』第3号、2013年3月)

【その他】

- ・『「尾張年中行事絵抄」に見る尾張名古屋の暮らし」(愛知文教大学連携市民講座、於：小牧市市民会館、2022年12月3日)
- ・「身近な暮らしの歴史を学ぶ 一 江戸時代の尾張のお酒事情 一」(愛知文教大学学び合う学び研究所セミナー、於：愛知文教大学、2022年12月3日)
- ・「歴史資料に見る、等身大の織田信長 一 泣いたり食べたり笑ったり 一」(愛知文教大学「信長学」サテライト講座、於：オンライン開催、2022年10月22日)
- ・「江戸時代の観光ガイド『尾張名所図会』で小牧を旅する」(愛知文教大学連携市民講座、於：小牧市市民会館、2021年11月6日、13日、27日)
- ・「伝記と史跡から見る織田信長 一 『信長学』イントロダクション 一」(愛知文教大学「信長学」サテライト講座、於：オンライン開催、2021年10月16日)
- ・動画コンテンツ「文化遺産フィールドワーク(オンライン) 有松の町並みを歩く」(第21回愛文祭、2020年10月11日～25日)
- ・「『尾張名所図会』にみる小牧宿」(小牧市公民館ゆうゆう学級、於：小牧市市民会館、2020年9月2日)
- ・「絵画を読む：非文字資料から読み解く歴史学」(愛知文教大学第4回図書館文化講座、於：愛知文教大学、2019年11月)
- ・「昭和の都市文化を考える 一 写真・絵葉書のデジタルアーカイブから 一」(川西市生涯学習短期大学、於：アステ川西、2018年11月)
- ・高大連携出張授業『「尾張名所図会」で読む小牧の歴史」(愛知県立小牧高等学校、2018年11月)
- ・「1960年代の日本 高度経済成長期の歴史的意義」(展示図録『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ 一 70年万博収集資料』、2018年3月)
- ・「梅棹忠夫アーカイブズに見る収集団の奮闘録」(『月刊みんぱく』第486号、2018年3月)

- ・「大阪の都市景観の変遷を探る」(『月刊みんぱく』第485号、2018年2月)
- ・「戌年で絵馬でネコ」(『月刊みんぱく』第484号、2018年1月)
- ・「大阪名所の今昔 — 浪花百景との対比 —」(川西市生涯学習短期大学、於：アステ川西、2017年11月)
- ・「水の都の風景 — 写真に残る堀川 —」(川西市生涯学習短期大学、於：アステ川西、2017年11月)
- ・「デジタル人文学はアナログの世界 — 写真資料のデジタル化研究から」(『みんぱく e-news』190号、2017年4月)
- ・「土地に名を刻む」(『月刊みんぱく』第470号、2016年11月)
- ・「写真資料のデジタル化とその地域研究における活用 — 昭和中期の大阪を撮影した写真資料による事例 —」(口頭発表、第273回みんぱく研究懇談会、於：国立民族学博物館、2016年8月)

令和5（2023）年度ティーチングポートフォリオ

氏名	内田吉哉	職位／役職	准教授／地域連携センター長
----	------	-------	---------------

1. 教育の理念

愛知文教大学は、「質実有為で宗教的情操を身につけた真人の育成」という建学精神に基づき、「一生を自立的に生き抜く強い心とそれを助ける社会力を備えた人材を育成する」ことを目的としている。また人文学部人文学科の教育目的として、「自他の文化に関する幅広くかつ深い理解にもとづく人文知の総合的な育成」を掲げている（本学ウェブサイトより）。

内田は人文学部において主に日本文化・日本史分野の授業を担当するものであるが、これらの学問領域の教育を通じて、本学の「グローバル英語プログラム」「中国語・中国文化プログラム」「教員養成プログラム」の3つの専門教育カリキュラムの土台となる人文知を備えた学生の育成を理念としている。

2. 教育活動の内容

(1) 担当授業

- ・ 絵画で読む日本史 A ・ 絵画で読む日本史 B ・ 戦国の伝記史料を読む
- ・ 戦国の城・合戦・生活を読み解く ・ 地域の歴史と文化遺産 A（小牧学）
- ・ 地域の歴史と文化遺産 B（犬山学） ・ 日本のサブカルチャー A
- ・ 日本のサブカルチャー B ・ ことばと人文学 ・ ことばと多文化教育 ・ 信長学
- ・ アカデミアゼミ A～D ・ 研究指導（日本文化） A～D【大学院】
- ・ 日本歴史文化研究【大学院】 ・ 日本歴史文化論【大学院】

(2) 公開講座等

- ・ 「歴史資料に見る、等身大の織田信長 ―泣いたり食べたり笑ったり―」（愛知文教大学「信長学」サテライト講座、於：オンライン開催、2022年10月22日）
- ・ 「身近な暮らしの歴史を学ぶ ―江戸時代の尾張のお酒事情―」（愛知文教大学学び合う学び研究所セミナー、於：愛知文教大学、2022年12月3日）
- ・ 「『尾張年中行事絵抄』に見る尾張名古屋の暮らし」（愛知文教大学連携市民講座、於：小牧市市民会館、2022年12月3日）

3. 教育の方法

本学での授業において、以下の3つの方針に基づいた教育活動を行っている。

(1) 高等教育機関にふさわしい認識能力・思考能力・表現能力の育成

大学生に求められる学習能力は、①情報を収集し、②その情報を自分の中で解釈・分析したうえで、③他者に発信できる表現力であると考え。これらの「大学生に求められる学習能力」は人文学のみならず社会科学・自然科学にも共通するものであると考え。そこで、授業においてはガイダンス時に「講義内容からどのようにノートを取るべきか」を大学の授業における基礎的技能として提示している。また期末試験において可能な限り論述方式の試験を行うことによって、授業内容を自分なりに解釈し、解答として文章によって表現することを求めている。論述試験における文章表現についても、設問に対して何が求められるのか（採点基準）を事前に公開することによって、単なる得点評価にとどまらず学生の表現能力向上に資することを心掛けている。

(2) 大学レベルの歴史学・日本文化に関する基礎的知識の修得

本学における担当授業のうち、「絵画で読む日本史 A・B」「地域の歴史と文化遺産 A・B」「戦国の伝記史料を読む」「戦国の城・合戦・生活を読み解く」など講義科目では、中等教育における通史的な歴史教育とは異なり、文化史・地域史を中心に置いた授業を行っている。そのため授業内容は通常の日本史用語だけでなく文化史・美術史・宗教史等の専門用語を多く含むことになる。そこで授業においては、専門用語の登場ごとになるべく丁寧な解説をくわえるよう心掛けている。こうした授業方法により、普段の日常会話や SNS 等で扱われる「あいまいな日本文化・歴史の知識」とは一線を画した、高等教育機関にふさわしい教養を身につけてもらうことを目指している。

また日本史分野の本ゼミに進む学生については、卒業論文作成において可能な限り一次史料にあたることを指導している。大学レベルで歴史学を学ぶ上で、原典に当たることの重要性・困難さを体験してもらいたいとの希望からである。

(3) 学生が満足度の高い大学生生活・自己肯定感を得られる教育

主としてゼミ・大学院等の少人数指導の科目においては、研究成果の絶対的な達成度より学生の相対的な成長度合・研究進捗を重視した指導を心掛けている。もちろんゼミ・大学院等の専門的な内容を追求する授業において、学問的厳密さを求めることは当然ながら必須である。しかし一方では完成した研究者を扱うのではない、学生を育てる教育機関として、学生が自身の成長を感じられる大学生生活を送れるように心がけることが重要であると考えている。

4. 教育活動の成果・評価と改善方策

授業評価アンケートでは、学習目的の説明・教え方の工夫・学生からの質問への対応・授業の満足度等でおおむね平均値を上回っていた。ただし学生の事前学習に関しては評価が低く、これは担当授業の性質上、出版された教科書等を用いず授業ごとに教員が作成した資料を配布する方式であるためと考えられる。シラバス内容は年次ごとにそれほど大きな変更を加えるわけではないものの、毎年授業内容を見直しアップデートを加えている現状から、授業資料の事前配布は難しいということがある。

また授業時に必ずプロジェクターを用いて資料や画像等を提示しているが、これらについて少数ながら「進度が早くノートが取れない」「興味のある資料・画像をもっとよく見たかった」等の意見が寄せられることがある。こうした意見については、著作権上問題のない範囲内で資料・画像はプリントアウトされたものも配布する、あるいはノートを取り損ねた部分については授業中でも発言してもらえば再提示するよう呼びかけるなどの改善を試みている。

5. 今後の目標

近年、大学においても実学志向が高まり、人文学を学ぶ意義が軽視されがちである。しかしながら大学における教育の意義は、単なる「役に立つ知識」の修得ではなく「学び方を学ぶ」ことにあると考える。本ポートフォリオ 3 (1) でも挙げたように、大学生が身につけるべき能力は①情報を収集する力、②情報を分析・解釈する力、③自分の意見を発信する力にあると考える。それは人文学・社会科学・自然科学といった学問領域によって左右されるものではない。

本学の教育活動を通じて学生に上記のことを知ってもらい、また大学生としてふさわしい能力を身につけてもらうことで、自身が「大学に行ってよかった」あるいは周囲から「大学に行った価値がある」と思ってもらえるようにしたい。